

一内水研通信一

第18号

平成30年4月

千葉県水産総合研究センター
内水面水産研究所
〒285-0866 佐倉市白井台 1390
TEL 043-461-2288
千葉県農林水産技術会議

シラスウナギの調査研究を行っています

利根川でシラスウナギの来遊量調査を行い、今までに遡上のピークが12月中旬から5月中旬であることを確認しました。今年度は2月までのところ、ここ数年の調査の中で捕れた数は最も少なくなっています。

□ シラスウナギの生態調査



袋網による採捕調査
(利根川河口堰右岸魚道)

土用の丑には欠かせないウナギですが、その稚魚（シラスウナギ）は年により捕れる量の変動しています。また、河川湖沼におけるウナギの生態には謎が多く、これらを解明して、ウナギ資源の適切な管理に役立てることが求められています。

ウナギの生態の中で特にシラスウナギは未知な部分が多くあります。

そこで、県有数のシラスウナギ採捕量を誇る利根川で、袋網による採捕調査を行い、シラスウナギが遡上する状況などを調べています。

□ 調査内容

利根川河口堰の右岸魚道内（千葉県側の魚道）に袋網と呼ばれる漁具を設置して、捕れた採捕物の中から、シラスウナギをとり出し、全長や体重などの測定を行います。

また、捕れた時の水温や塩分などの測定も行い、環境要因との関係についても調べています。



袋網内の採捕物
(下の写真はシラスウナギ)



アユ資源の増大に関する取り組み

冷水病に負けないアユの生産の研究をしたところ、抵抗力のある稚魚を作ることができるようになりました。

□ 千葉県の河川で利用されているアユ

千葉県を流れる多くの河川にアユが生息していますが、中でも房総半島を流れる養老川、小櫃川、湊川、夷隅川では地元の漁業協同組合により、アユの稚魚が放流されています。

アユは、釣りの対象魚として人気があり、毎年、6月の釣り解禁日には多くの人で賑わいます。また、食べてもおいしいアユは投網漁でも大人気で地元の方々にも愛されている魚です。

しかしながら、最近の河川では、カワウによる食害や病気の発生など、アユを取り巻く環境は厳しさを増しています。



養老川（観音橋付近）

□ 病気に負けないアユ稚魚の生産



試験用のひれ切り作業

千葉県では特に平成6年以降、大量へい死を引き起こすアユ冷水病の発生が頻発したため、調査研究を続けてきました。

その結果28年度には、アユの放流用稚魚生産において、継続飼育したメスに、野生のオスをかけあわせることで、病気に強いアユを作り出せるようになりました。

□ 今年のアユ放流は4月から始まります

千葉県におけるアユの放流は河川の水温が上がる4月以降に始まります。約半年にわたり、多くの人が手塩にかけて育てたアユ稚魚は、活魚輸送車に積み込まれ、各河川で放流されます。

放されたアユは、4-5月のうちに川に慣れ、大きく育って釣り人たちと対峙するときを迎えます。

今年も遊漁者の皆さんが楽しめるよう、元気なアユが放流されるでしょう。また、当研究所もアユの調査を継続していきますので、ご協力をお願いします。



アユの放流体験

養殖技術の向上にむけた指導・研究をしています

内水面水産研究所が指導しているアオノリは近年不作が続いていましたが、平成29年度は生産者の積極的な取り組みもあり、3月まで生産することができました。

□ アオノリ養殖～自然環境をいかに味方にできるか？～



アオノリ養殖漁場

千葉県九十九里地区の3河川（南白亀川、一宮川、夷隅川）では、主に秋から正月にかけてアオノリ養殖が行われています。

アオノリは海のクロノリと同じような方法で養殖しますが、3河川では、天然採苗から、摘み取り、ノリ漉き、乾燥までの作業をすべて手作業・天日干しで生産しています。

近年は、秋の高水温など天候不順の年も多く、秋以降の水温がなかなか下がらずにうまく育たないことが多々

ありました。

そこで、各漁協が行っている漁場環境調査（水温や塩分の動向）を支援するとともに、養殖試験網を設置させてもらい、アオノリの生長と環境との関係や網を設置する日による違いなどを観察しています。また、害藻のシオミドロ（現地呼称：アカモク）と環境要因についても調査を行っています。

□ 平成29年度は2年ぶりの生産販売

今年度は27年度以来の生産となり、短期間でしたが量販店などにも製品を並べることができました。

また、2月から3月にも若干の生産が行われ、久々に活気が戻ってきたアオノリシーズンでした。



天日干し中のアオノリ



市販用に包装したアオノリ